

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

情報システム学部教務委員会／情報システム学部データサイエンス教育専門部会

(責任者名) 有田 大作

(役職名) 学部長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本プログラムは、情報システム学部において令和6年度入学生から開始しており、卒業要件に位置付けられた必修科目を中心に構成・実施している。 履修状況等については、情報システム学部教務委員会の専門部会として設置された「データサイエンス教育専門部会」において報告・共有されており、学部全体で学生の履修状況や学修成果を把握できる体制を整えている。
学修成果	本プログラムにおける学修成果は、各科目のシラバスに明示された学習到達目標に基づき、授業内の小テスト、課題レポート、定期試験等を通じて達成度を確認している。また、情報システム学部教務委員会では、各科目の単位取得状況および成績分布について報告・分析を行い、学修成果の状況を学部全体で共有している。こうした分析結果は、今後の教育内容の見直しや指導方法の改善、プログラム全体の質向上に資する重要な基礎資料として活用している。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	本学では、すべての開講科目において受講学生を対象とした授業評価アンケートを実施している。本プログラムに該当する科目についても例外ではなく、学生による自己評価を通じて、学修内容の理解度や授業運営の適切性を把握する仕組みを構築している。アンケートでは、授業全体への満足度や自身の取り組み状況に加え、「到達目標をどの程度達成できたと感じているか」「情報技術(ICT)運用力が身についたと感じるか」といった学修成果に関する項目を設定しており、学生の主観的な理解度の把握に活用している。今後も、学生の声を的確に拾い上げ、教育の質向上に資する自己点検の一環として継続的に活用していく予定である。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	本プログラムは、情報システム学部において令和6年度より開始され、卒業要件に位置付けられた必修科目を中心に構成・実施されている。 したがって、令和6年度以降に入学した学生の履修率は100%である。 そのため、後輩や他の学生への推奨の有無にかかわらず、次年度以降に入学する情報システム学部の学生は、全員が本プログラムを履修することとなる。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本プログラムは、情報システム学部の卒業要件に位置付けられた必修科目を中心に構成されており、カリキュラム上、原則として4年次までに全員が当該科目群を履修・修得する設計となっている。 結果として年次進行することにより、本プログラムの履修率は100%に達することを計画している。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>学外からの視点</p> <p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p> <p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本プログラムの修了生は、現在卒業していないため、進路や活躍状況、企業等からの評価については現時点では把握できていない。しかし、令和9年度以降の卒業生調査を通じて、本プログラムを修了した卒業生の進路や活躍状況を追跡し、具体的なデータを収集する予定である。</p> <p>企業との連携を強化するため、就職先企業との意見交換やインターンシップ科目における企業からのフィードバックを取り入れることにより、企業が求めるスキルや知識に対するプログラムの適合度を評価している。</p> <p>さらに、情報システム学部では、情報セキュリティ産学共同研究センターを併設しており、共同ラボに入居する企業と連携して共同研究を進めるなど、産業界との連携体制を構築している。この体制の中で、本プログラムに対する産業界との意見交換も行い、フィードバックを教育内容や手法に反映する仕組みも整えている。また、本プログラムの科目の一つ「データサイエンス入門」では、eラーニングコンテンツとしてコースベース株式会社が提供する教材を使用している。同社は多様な業態の企業を顧客としており、産業界の最新ニーズや技術動向を反映したコンテンツにより、学生が実践的な知識を学びながら産業界の視点を理解できるようにしている。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>本学では、初年次教育として全学生が必修で履修する「教養セミナー」を設置しており、その中で数理・データサイエンス・AIを含むさまざまな分野に触れる機会を提供している。これにより、学生が「学ぶ楽しさ」や「学ぶことの意義」を実感し、自らの関心を広げていけるよう支援している。さらに、2年次以降の専門教育においても、授業評価アンケートの結果を丁寧に分析し、専門部会において、教育内容や授業方法の改善に向けた議論を継続的に行い、より効果的に学生の知的好奇心を喚起できるよう努めている。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>受講学生による授業評価アンケートの結果は、授業内容や教授方法に関する重要なフィードバックとして位置づけている。各授業担当者はアンケート結果をもとに、授業の優れた点や改善点を把握し、次回の授業改善に活用している。大学としても、全教員にアンケート結果の分析・対応を義務づけ、授業改善の仕組みとして制度的に定着させている。さらに、授業評価アンケートに加え、授業中に実施される随時のフィードバックも重視し、学生が理解しづらい箇所を早期に把握し、その場で補足説明を行うよう努めている。こうした双方向的なコミュニケーションを通じて、学生が主体的に学習に取り組み、理解を深められる教育環境の整備に努めている。</p>